

司式:大谷 昌恵
 奏楽:吉田千鶴子

前奏:「神より我離れじ」(J.N.ハンフ)

招詞:主は多くの民の争いを裁き、はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げずもはや戦うことを学ばない。(ミカ4:3)

讚美歌:7「ほめたたえよ、力強き主を」

交読詩編 4篇

- 01 【指揮者によって。伴奏付き。賛歌。ダビデの詩。】
 02 呼び求めるわたしに答えてください/わたしの正しさを認めてくださる神よ。苦難から解き放ってください/憐れんで、祈りを聞いてください。
 03 人の子らよ/いつまでわたしの名誉を辱めにさらすのか/むなしさを愛し、偽りを求めるのか。〔セラ〕
 04 主の慈しみに生きる人を主は見分けて/呼び求める声を聞いてくださると知れ。
 05 おののいて罪を離れよ。横たわるときも自らの心と語り/そして沈黙に入れ。〔セラ〕
 06 ふさわしい献げ物をささげて、主に依り頼め。
 07 恵みを示す者があろうかと、多くの人は問います。主よ、わたしたちに御顔の光を向けてください。
 08 人々は麦とぶどうを豊かに取り入れて喜びます。それにもまさる喜びを/わたしの心にお与えください。
 09 平和のうちに身を横たえ、わたしは眠ります。主よ、あなただけが、確かに/わたしをここに住まわせてくださるのです。

朗読聖書①エレミヤ書 20:7-13

◆エレミヤの告白

- 07 主よ、あなたがわたしを惑わし/わたしは惑わされて/あなたに捕らえられました。あなたの勝ちです。わたしは一日中、笑い者にされ/人が皆、わたしを嘲ります。
 08 わたしが語ろうとすれば、それは嘆きとなり/「不法だ、暴力だ」と叫ばずにはいられません。主の言葉のゆえに、わたしは一日中/恥とそしりを受けねばなりません。
 09 主の名を口にすまい/もうその名によって語るまい、と思っても/主の言葉は、わたしの心の中/骨の中に閉じ込められて/火のように燃え上がります。押さえつけておこうとして/わたしは疲れ果てました。わたしの負けです。
 10 わたしには聞こえています/多くの人の非難が。「恐怖が四方から迫る」と彼らは言う。「共に彼を弾劾しよう」と。わたしの味方だった者も皆/わたしがつまずくのを待ち構えている。「彼は惑わされて/我々は勝つことができる。彼に復讐してやろう」と。
 11 しかし主は、恐るべき勇士として/わたしと共にいます。それゆえ、わたしを迫害する者はつまずき/勝つことを得ず、成功することなく/甚だしく辱めを受ける。それは忘れられることのない/とこしえの恥辱である。
 12 万軍の主よ/正義をもって人のはらわたと心を究め/見抜かれる方よ。わたしに見させてください/あなたが彼らに復讐されるのを。わたしの訴えをあなたに打ち明け/お任せします。
 13 主に向かって歌い、主を賛美せよ。主は負しい人の魂を/悪事を謀る者の手から助け出される。

朗読聖書②ヨハネによる福音書 11:17-27

◆イエスは復活と命

- 17 さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日もたっていた。

18 ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほどのところにあった。

19 マルタとマリアのところには、多くのユダヤ人が、兄弟ラザロのことで慰めに来ていた。

20 マルタは、イエスが来られたと聞いて、迎えに行ったが、マリアは家の中に座っていた。

21 マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。」

22 しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」

23 イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、

24 マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。

25 イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。

26 生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」

27 マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」

祈祷

聖なる、主なる神さま、聖名を崇め賛美致します。8月も中半を過ぎましたが、いまだ猛暑が続き、私たちは心も体も疲れきっております。しかし、そんな私たちにあなたは、今日も新しい命を与え、この礼拝堂へ、あるいは、オンラインでの礼拝の場所へと私たちを導いてくださいました。今、ここに、あなたを賛美し、祈りを合わせ、そして、御言葉を戴くことを赦されました幸いに心から感謝致します。

この猛烈な暑さも、地球温暖化がなければ起こらなかったこととされています。私たち人間が、今まで自分たちに都合のいいように、ということだけを考えて生きてきた事の代償が人の命を脅かすほどの環境破壊へと繋がってきたのだとも言えます。神さま、どうか、私たちが、今の時にこそ立ち止まって、この地球のことを考え、あなたがお創りくださったこの大地を守っていくことができるように、私たちに必要な知恵をお与えください。この地球上の全ての命への責任を任された私たち人間が、その役割を果たして行くことができるようにお導きください。

神さま、平和について考えることの多いこの8月ですが、今もなお、世界のあちらこちらで、国と国との戦いが続き、尊い命が奪われています。戦争がどれほど恐ろしいものであるか、そして後々までも、人々に深い傷を残すものであるかを、私たちは、今一度、夫々の心に刻み、平和を求め、の歩みを一歩、踏み出して行きたいと願います。また、人々の荒んだ気持ち、日々の生活の中でも小さな諍いを生み、世の中が生き辛くなっています。どうか私たちが、毎日の生活を穏やかに過ごすことができますように。特に、幼子にとって安全で安心できる社会が守られますように、私たちの生活をお支えください。

神さま、本日は、水谷勤先生が御言葉の取り次ぎをしてくださいます。水谷先生の上に、あなたが豊かに聖霊をお注ぎください。そして先生が大胆に豊かに御言葉をお語りくださいますようにお導きください。聴く私たちの心も開き、御言葉を素直に受け入れることができますように整えてください。

今日、日本中、世界中で御前に献げられる礼拝の全ての場にあなたがいてくださって、その礼拝を豊かに祝ってください。特に困難な状況にある教会の礼拝の上に、あなたの豊かな顧みがありますようにと切に願います。

この感謝と願いの祈り、尊き主イエス・キリストの聖名を通して御前に

お献げを致します。アーメン。

讚美歌57「ガリラヤの風かおる丘で」

説教 「主の前に共に立つ信仰」

水谷 勤

8月の第4主日を迎えました。今朝も暑い日ですけれども、こうして、私たち健康が支えられまして、また、私も皆さんと共に礼拝を献げることができますことを神さまに心から感謝しています。今日も与えられました聖書の箇所を通して、御言葉が私たちの内に深く止まることを祈りつつ聞いていきたいと思えます。

以前、或る青年とキリスト教について話をしました。この青年は刑務所で何年も過ごした経験を持つ人ですけれども、彼曰く、“刑務所の中では、キリスト教は人気がありますよ”と言います。定期的に宗教の時間があって、自主的に選んで、その宗教指導者の話を聞くことができるのだそうで、彼はいつも、キリスト教を選び、牧師の話を熱心に聞いていたと言います。“刑務所の中では人気がありますよ”、この言葉が少し気になりました。そこには、きっと“キリスト教は愛の宗教”だという漠然とした憧れがあるからかもしれません。また、より根本的には、その人が冤罪でなければ、過ちを犯してしまったことと向き合った時に、キリスト教の「悔い改め」が、さらなる希望につながるということを、自ずとその心が知っているからではないだろうか、そのように思いました。“悔い改める”ということ、これは、旧約の預言者たちが常に語ったことであります。

預言者エリヤが最初に神に語りかけられ、使命を与えられたときの様子は、次のようなものでした。主は、エリヤの口に触れ、「わたしの言葉をあなたの言葉に授ける(エ11:9)」と言われ、「諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる(同10節)」と言われました。そして、その際に、それを「抜き、壊し、滅ぼし、破壊し、あるいは建て、植えるために。」と、その目的を語られました。つまり、諸国が、また、“旧約のイスラエルの民が、立ち上げられるか否かは、その御言葉にかかっている”と言えます。またこの「抜き、壊し、滅ぼし、破壊し、あるいは建て、植えるために」という言葉は、エリヤ書の中で何度も出てきますので、この御言葉がエリヤ自身の働き、また彼の自覚にとって重要な意味を持っているのだと言えます。

エリヤの時代、例えば「ハナンヤ」というエリヤと対立する人物がいました(28:1章以下)。ハナンヤは、バビロン捕囚が始まり、連行されて行った人々を連れ帰り、バビロンの王に課せられたその軛を2年の内に打ち砕くと、そのように言い放ちました。危機的な時代の中で、そのように、勢いがあり、また、安易な希望を語る者の言葉は人々に歓迎され受け入れられますが、エリヤやこの聖書の預言者たちのように、真の悔い改めに立ち返ることを語る者は、むしろ、迫害を受けるということも聖書は伝えています。しかし、この旧約イスラエルの民の将来が、「建てられ、植えられるために」は、時代にエリヤのような預言者が必要でありました。彼は一人ひとりの人間が、心からの真実を求めること、また、その御言葉と向き合うこと、そのために真剣でありました。そしてそうすることが、民全体がその先に、「建てられ、植えられる」という、そのための唯一の道であることを信じ、その使命を受け止めていきます。今日の箇所——今日の、日本基督教団の聖書日課の箇所——、エリヤは、自らの内面の深い苦悩を顕わにしています。そしてそれは彼に与えられたその召命に真剣であるからこそ抱える苦悩です。エリヤ書には、彼の思いを率直に神さまにぶつけてい

る内容が幾つもあり、ときには今日の箇所もそうですが、迫害する者に復讐心さえ彼の内に湧いて来る、そのことも隠さずに告白しています。しかしそのようにして自らの自己を正直に見詰め、神さまとの関係を深めていく、その信仰の姿を読み取ることができます。

彼の置かれている状況について今日の箇所を見てみると、8節には恥と誇り、10節には多くの人の非難、さらに、「わたしの味方だった者も皆、わたしがつまづくのを待ち構えている」とあり、これは実際に彼の故郷であるアナトの人々が、彼の命を狙うほどにエリヤに反発し、彼を迫害していた様子を伝えています。ある人はエリヤ書のこの箇所は、“キリスト者がつける日記に似ている”と言います。出来事の記録という意味の日記ではなくて、自分の内面世界をひたすら書き記し、頁を埋め尽くすような日記、時にはその筆圧でノートの紙が破けてしまいそうになることもある、しかし次第にその言葉は自らの祈りの言葉になり、そして、落ち着きを取り戻したかのように聖書を開き、そこに御言葉をしっかりと記す、そのようなクリスチャンの日記、エリヤも思いの丈を書き記し、そして、やがて神さまに向かって、「あなたの勝ちです。(20:7)」「わたしの負けです。(20:9)」と記します。彼の格闘は、もはや自分を迫害する者との対立ではなく、また、自分自身との戦いでもなく、神さまを相手取って、主の御言葉と向き合っているものであります。そして全能の主に全ての事の答があるということ。今日の、この箇所中段では、彼を苦しめる者たちの声が次々と挙げられています、11節で彼は言います。「しかし主は、恐るべき勇士として、わたしと共にいます。」と告白します。「しかし主は、恐るべき勇士として、わたしと共にいます。」、この言葉は、この段落の中だけの気付きではなく、おそらく、彼の生涯の活動全体の中でも重要な転換点となる、その気づき、その地点であったと思われる。自分を遣わしたのは主なる神、その御言葉に他ならず、そして今向き合っているこの局面も、主が責任を持っておられるはずだからだと。そして彼は12節の最後のところで、「わたしの訴えをあなたに打ち明け、お任せします。」と明け渡していきます。「打ち明け、お任せする」とは、元の言葉では、これは一つの言葉(גָּרָא-גָּרָא)「露になる」ですけれども、“自分を隠すことをしない”と言う意味です。また、この言葉が、神さまご自身の場合に用いられる時には、“覆いを取り除けるようにして、ご自身を表わされる”と言う意味で聖書に度々出て来ます(創35:7他)。そうであるとする、私たちの場合においては、神さまご自身が表される、つまり、主イエスを通してご自身を明らかにされ、ご自身を表された神さまを私たちが思う時に、私たちの側で、もはや“神など関係がない”かのように生きて行くことはできないと思われ、いやむしろ、主の方に向き直り、神さまに対して自らの思いの丈を自己開示し、打ち明け、明け渡すということが、エリヤの、ここで言う「わたしの負けです」、「あなたの勝ちです」という境地であり、主の前に御言葉に全ての信頼を置くことではないでしょうか。そしてそれが個人の中の出来事だけではなく、エリヤは、一人ひとりが心から真実を求めること、その真実と向き合うことこそが、民全体の将来が、「建てられ、植えられる」ということを神さまから知らされていきました。滅んでいくのではなく、「建て・植えられる」ということ。また、この「植えられる」ということは植物の譬えでありますから、そこに生命が宿っている、この“真の命を与えられる”、その視点が旧約において語られ、そしてまた、まさにそのことは、新約聖書の中においても、特に今日の箇所においても見られることであると思えます。

今日の聖書の箇所は、『ヨハネによる福音書』の11章であります、こ

ここではベタニアの村に住むマリアとマルタ、その兄弟ラザロの死をめぐる場面が記されています。特に、聖書朗読の箇所においては、マルタの信仰が問われています。“もう4日も経っています”という全ての希望が奪われている状況において、マルタが主イエスへの信仰を告白している箇所です。主イエスとのやり取りの中で、復活をめぐる対話の後に、特に、マルタは主イエスに問われ、「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております(11:27)」と言いました。夫々の福音書の中においては、どの人物がイエスに対する信仰告白をするかということが、その福音の特徴の一つを表していると言えますけれども、ヨハネ福音書においては、実はペテロが6章で、“あなたは神の聖者です、神の聖なる者です(6:69)”と答えています。しかし、それに対してマルタの方は、“あなたは世に来られるはずの神の子、メシアであると私は信じております、強く信じています”と、はっきりと、“救い主キリスト、あなたなるお方はそのお方である”と言い、十二弟子が言い表すことができなかった『キリスト告白』をマルタが言い表したその信仰に、この福音書は光を当てています。あのマルタが、誰もが実に絶望しきって、憔悴しきっている時に、また、自らもその思いをなんとか振り切り、誰よりも先に真の希望をキリストの内に見出し、その信仰を力強く告白している、「主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じています」、私たちが礼拝毎に、主の前にその思いを与えられる告白の言葉ではないでしょうか。

ヨハネ福音書では、主イエスとの対話が深まる中で、主の真理が私たちに投げかけられるように発せられる場面が多く感じられます。今日の箇所では、「わたしは復活であり、命である。(25節)」という真理の御言葉を主イエスは言われます。そう言われる時に、私たちは、その言葉を思い巡らし、自ずとその厳粛さの前に立たされていると思うのです。と言うのも、私たちは主イエスご自身の死があってこそ復活の命を与えられるからです。ラザロが死んでも生きるために主はご自身の命を献げられ、私たちが生きる為に主はご自身を十字架の死に渡されました。私たちは自ずとこの厳粛な思いを持って主の前に立たされてはいないでしょうか。

今日の箇所でもう一つ注目できる点は、マルタとマリアとともに居たユダヤ人たちの存在です。彼らは彼女たちを慰めていました。19節のところにも、その彼らが、多くのユダヤ人たちが、兄弟ラザロのことで慰めに来ていたということを伝えています。また後の箇所には、姉妹たちと共に涙を流したという様子が記されています(11:31)。ラザロのことで悲嘆に暮れている状況に寄り添うこの周囲の人々が見守っています。改めてマルタのことを思い出して考えてみますと、マルタは、いろいろな人の世話を進んでしていました。彼女は、主イエスの居られる場所の中と、そして、その周辺に居る人々を繋ぐように、きっと愛と誠実さをもって行き来しました。そして、それらの人たちの事情や悩みをよく知っていたと思います。人々の葛藤やもどかしさを察知して、そのことを共に経験しつつ、自らは、主イエスに対する信仰の告白をしています。似たような意味で私たちも、この主イエスの前に立つ時に、私たちの隣人、また私たちの社会や世界に心を止めることができるのではないかと思います。私たちにしても、私たちの周りや社会、世界の状況をつぶさに、その葛藤や困難について、常に繋がりを考え、そして、その状況とともに、主イエスの前に立つということ、主イエスの命の生きた希望に目を開かれ、執り成しを願い祈りつつ、主への信仰告白として行くというその姿勢を、私たちは教えられているよ

うにも思うのです。

ふと或ることを思い出しました。牧師は按手式で按手を受けますけれども、牧師が牧師になるための式であります。きっと参加された方も多くおられると思います。その式の中では、按手を受ける人が会堂前方でひざまづき、多くの先に牧師になった者たちに囲まれるようにして、その人の上に手が置かれます。コロナの際にはできませんでしたが、その際には出席した牧師が全員前に出て行きまして、その輪が何重にもなったり、扇形に、あるいは左右に列が伸びて並ぶということがよくあります。その場合には直接手が届かないので自分の前に居る牧師の肩に手を置くということをする習慣があります。そして、司式者の式文による祈りの言葉のその動きが強くなる時には、自分の肩にもその手の重みが伝わってくる、そういう按手式の場面です。これはそれによって牧師が誕生するという本来の趣旨でありますけれども、まあ、そういった少し違う観点かもしれませんが、自分の肩に置かれた手の重みということを経験するときに、それがどのように感じられるかという、その手の重みには、自分の背後にある広い意味で私たちとの繋がりのある家族や隣人、また私たちの生きる社会の求め、切なる願い、その重みも私たちがその時に受けている、そのように想像することができるのだと思います。似たような意味で今日の箇所において、マルタは主イエスの前に立ちました。その本心において、はっきりと信仰を言い現しました。その際には、マルタの周りには、ユダヤ人たち、その社会が取り巻いていました。彼らは、その真実と希望のあることを信じたいという切なる願いを持ってそこに立っていたと思います。あのマルタのことですから、人々の世話をよくするその良き感性をもって、人々のことを常に気にかけて、生活し、その賜物をもって社会としっかりと繋がっていたと思います。彼女が主イエスの前に立つ時に、その隣人、社会との繋がりを、それを保ちつつ、そこに立っていたと思うのです。世の苦しみ、その悩み、その求めを自らの肩に受け止めつつ、主イエスへの信仰を力強く信仰告白したマルタ、その姿を私たちも今日心にとめることができるのではないのでしょうか。私たちにしても、主日毎の礼拝において、私たちの生きる社会の、その切なる願い求めを受けつつ、真の主を礼拝し、賛美と共に信仰を言い表したいと願います。お祈りをお献げ致します。

主なる御神さま、この主日も、御言葉の恵みと導きを心より感謝致します。主イエスが今日も私たちの命を支え、生きる力を与え、赦しを、また、永遠の命を与えてくださいますことを心より感謝致します。“主の平和がこの地になりますように”と、共に願い、祈ります。十字架の主の前に、私たちが過去の過ちと向き合い、厳粛な思いの内に、真の悔い改めを与えられ、暴力と破壊の道ではなく、命の道、その希望が与えられますように。どうか、主ご自身が、建て、植えてくださいますように、心から願い祈ります。主の前に立つ私たちも、どうか、私たちに与えられた繋がりのために、執り成しの祈りを献げ、そして揺るぎなく、主への信仰を力強く言い表して行くことが出来ますように、これからも助け導いてください。主の体なる教会を通して、御恵みと深い慰め、真の希望が満ちますように、心より願い祈ります。これらの祈りを、尊き我らの救い主、主イエス・キリストの聖名によってお献げ致します。アーメン。

讃美歌:358「小羊をば ほめたたえよ！」

献金・感謝(??)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

父なる神さま、兄弟姉妹と共に、この暑い日の中でしたけれど、共に礼拝を献げることが赦されましたことを心から感謝申し上げます。

本日は水谷先生から、「主の前に立つ信仰」の説教を通して、御言葉を豊かに与えていただき、感謝申し上げます。私たちがこの1週間の夫々の旅路の中で、御言葉を糧として歩むことができますようお導きください。

私たちは必要な物を与えられ生きることが赦されていることを感謝致します。今、夫々が与えられた物の中から、感謝と献身のしるしを御前に献げます。どうぞ祝して教会の御用のために用いてください。

主が教えてくださいました「主の祈り」を共に唱和し、新しい日々を迎えさせてください。「主の祈り」…アーメン。

派遣：讃美歌 92「主よ、わたしたちの主よ」

祝福：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の親しい交わりが、あなたがた一同と共に、また私たちが心に留める一人ひとりの上に、限りなく豊かにありますように。アーメン。

報告：(1)会員消息：8/20水、西山光生さんが逝去されました、89年の地上でのご生涯でした。葬儀は 8/26火午後 1:30 より、当教会で執り行います。兄弟が御許で平安でありますように。また、ご家族の上に主の慰めがありますようにと祈ります、以上、謹んでお知らせ致します。(2)週報誤字訂正：戸山真理⇒外山真理。

後奏：「ただ君にのみ、主イエス・キリストよ」(F. W. ツアツハウ)